

---

# 勇者のまなびやっ！

紅月 空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

勇者のまなびやつ！

### 【Nコード】

N8275W

### 【作者名】

紅月 空

### 【あらすじ】

世界に“魔物”があらわれ、約100年後。人は、魔物に対抗できる魔法をみにつけ、勇者を量産することをきめた。

その学校こそ、勇者育成学園。

チート能力をみちながあらも低レベルクラスの俺は、日々魔物駆除をしながら、親友ヤシロ達と学園生活を送っていた。

成績なんてどうでもいい。俺はゆっくり毎日を過ごすのだ。



## プロローグ

「これで任務完了、か」

後ろで魔法撃つただけの俺や他の同級生二人はほとんど無傷で済んだが、前線で刀を振り回していた同級生（ソラくんだった）は、返り血を浴び、足から出血をしていた。俺が治癒呪文をかけると、すぐに傷は癒えた。

「何回やつても気持ちのいいもんじゃねえな」と、同級生の一人がいう。同感だ。

いくら魔王とはいえ、イキモノをころすのは気持ちのいい気がしない。特に、弱い奴に複数で挑むのも、だ。

「そっぴやユウ君はこれで何体目？」何体、というのは、魔王のことだろう。

同級生の女子の聞き飽きた質問に、素直に答える。「4体目だな」「えっ？嘘っ！」嘘じゃないって。

はあ、やっぱこんなんだから、いつまでたってもDランクなんだろうか……。

魔王一体につき、何人の勇者が必要なのか。それは、勇者自信の能力で変わってくる。

すごく強い勇者なら、一人でも魔王を倒せるだろうし、逆に仲間の力を借りないと倒せない勇者もいるだろう。

逆にいうと、強い勇者が4、5人いれば魔王なんてあっさり倒せるのだ。

それを実現するためにできたのが、「勇者育成学園」という国立

の学校である。国が作ったと俺でもわかる、何のかつこよさもないネーミングだ。人々の間では“勇学”と略されることが多い。

簡単に説明すれば、生まれて12年一（つまり12才）で入学でき、20才までそこで勇者としての知識・実力を養い、一般的教養も学ぶ学園である。まあ、魔物退治も請け負う機関だが。

しかし、勇者の素質を持つ人間は数少なく、ほとんどが国のデータで選ばれ入学させられる。つまり、勇者になりたくてはいるのは難しく、なりたくもないのに入学権利を得られてしまう奴のほうが多いのが現状だ。

そしてこの俺、“不知火優”<sup>ししめいゆう</sup>は、後者でありながら入学した生徒の一人である。学費が安く、国の支援もあるから、と母が入学手続きをしたらしいが、とんだおせっかいである。戦いは嫌いだから。

だがいまさらやめる訳にもいかず、むりにでもこの学園生活を楽しもうとしているのだが……。

## プロローグ（後書き）

初投稿ならびに、初めてしっかりと書いた小説です。読みにくいかもしれませんが、暖かいアドバイスがいただけただけなら幸いです。

さて次回、魔王の数とは、学園の意味とは。そこらへんをかいていきたいとおもっています。どうぞご期待！

## 寮にて

“勇者育成学園”の開校。それは、およそ200年前にさかのぼるらしい。

地球に突如現れた、魔物といわれる怪物たち。そして、それを操る魔王の出現。

世界政府は、全軍事力をあげて立ち向かい、人類と魔王軍のにらみ合いが続いた。

そんな中、世界に「魔法」を使えるものが出現しはじめる。

その魔法使いたちは、圧倒的な力で魔王軍を消滅させた。人々のあいで語り継がれる 勇誕の日 だ。

それから、政府は次々とあらわれる魔物と魔王に対抗すべくある学園を作った。それが「勇者育成学園」である。

「勇学」と略されるこの学園では、魔王があらわれたとき、任務として学園から4人1組の“パーティー”が派遣される。

そして、魔王にもランクがあり、弱い魔王はDランク、そこから強くなるにつれC、B、A、AAAとランクが上がっていく。勇者候補生も同様にだ。

そして俺は、Dランクのため、Dランク魔王の任務に派遣され、寮にもどってきたんだが……。

「あゝ、だりいだりい。疲れたー。明日授業休もつかない」魔王退治の次の日が授業など、ふざけてると思う。

「そんなんだから、単位おとしてDクラスなんだよ。もっと努力し

て、Bくらいは目指さないと駄目だよ？」

こいつは同じ寮の御船社<sup>みふねやしろ</sup>。Aクラスだ。2人で1部屋なのだが、ランクは関係なく入学順で割り振られる。社<sup>やしろ</sup>も俺と同じ16才だ。「と、いわれてもだな。俺は勇者を希望してる訳じゃないし、第一戦いは嫌いなんだ」

「実力は、Aクラス並なのになんかどうしてこうなるのかな……」へっ、お世辞は聞き飽きたぜ。

だいたい、魔王がこんなにいるのがおかしいんだ。昔のあーるぴーじーとかいうゲームでは、魔王一体が常識だったらしいぜ。今は、いろんな規制で魔王がでるゲームなんて売られてないが。

「そうはいつても、これは遊びじゃないんだよ？真剣にしないと、命も危険だし」

「あーもう、うっせえ、俺もう寝る！おやすみ！」

俺はそういうと、布団に潜り込んだ。説教なんて聞いてられっか。ましてや同級生の説教なんか。

そして俺は眠りについた。

「優、勉強机整理しとくよ？……あれもう寝た？」



## 寮にて（後書き）

短くてすいません。次は長く書きたいと思います。  
感想どんどんください。では。

鬼の授業と女子生徒！？（前書き）

11/6日に改稿しました。

## 鬼の授業と女子生徒!?

時間割 6月×日

- 1 接近戦実習
- 2 勇者学
- 3 魔法学
- 4 薬物学

昼食 (10分)

- 5 剣術指導
- 6 魔物学
- 7 補習
- 8 補習
- 9 補習

10 補習 (7、8、9、10は5時から9時まで。他の補習者はいないから、そのつもりで)

「……なんだよ、コレ。俺の好きな遠距離授業ないし、第一補習俺だけじゃん!」

「……さぼってるからだと思っよ?」いいんだ、社むいつっこまないでくれ。

社むいが持つてきた時間割、それは地獄への案内図のようだった。(優にとって、だが)

そして、なにより補習がおおい。逆に、優が目指している魔法使いになるための、授業が少ない。

……しかも補習は、俺だけ、という話である。おい。

「これじゃ、最低でも10時に寮にもどってくることになるな」  
そもそも、俺だけってのは、やっぱおかしい……。みんなさぼってないのか?そんな青春でいいのか?

「優、それは駄目人間のいうことだよ…」

「うるさい、うるさい！補習なんてやってられっか！やすんでやるー！」

「だめだよ。今日くらいはいかないと、単位おとして留年だよ？」

正論である。実際問題15才からは、留年制度があるのだ。

おい、なんで社がそこまで気いつかうんだよ。

「なんでって…、そりゃ来年も優と一緒に学園生活送りたいもんくつ、そんな言い方されるといかざるをえないじゃないかっ。

社は男なのに、妙に接し方や動作が心をくすぐる。顔も中性的だし、初対面だと、性別がわかりづらいんじゃないだろうか。いやいや、待て。今はそんなこと考えてる場合じゃない。今すべきなのは「仕方ないな。今日はいくよ、授業」あんなこといわれて断るのは人間じゃない。

「ホント？ よかつたあ〜」

「そこまで安心しなくても……。まるで俺駄目息子じゃないか…」

「さぼりは駄目人間だと思うんだけど、ってかさっきいったね、これ」

それより、授業の準備準備。

「あ、そうだね。ごめんごめん」

久しぶりってほどでもないが、接近戦実習は、ほとんど休んでいる。嫌いなものもあるが、担当の九護教諭が（教諭より鬼先生のほうが、適切だろう）苦手なのだ。怖いのだ。

九護教諭、いや鬼は、問題をおこした生徒を生徒指導室で一日指導というのは序の口で、体罰はもちろん、あげく魔物討伐に一人でいかされたりするのだ。（先生もついてきてはくれるが）

まさに、先生の鏡ともいえる先生である。

「優？ 普通そんな先生はいないし鏡つていえないんだけど……」

「え……、まじ？」

まあ、物心ついたときからこの学園なんだし、世間一般の先生像なんてしらなくて当然か…。社は物知りだからしってるのだろう。

まあ、とにかく恐ろしい教諭なのだ。

でも、社の頼みと九護の鬼指導から逃げることを天秤にかけた場合、社の頼みの方が格段に重い。うむ、頼みを断るのは駄目だ。

「ふつ、鬼指導なんか楽に乗り切ってみせるぜ!」「おお、かつこいいよ!優!」

1時間目の授業、簡単にのりきってやる!

## 1時間目

前言撤回。無理、もう死ぬ。

意気揚々と1時間目の接近戦実習の授業場所、すなわち戦闘ドーム(昔あった東京ドームとかいうドーム一個分らしい)にいった優と社だったが、九護は優に目をつけるなり、

「久しぶりだなあ、優。やっと出席するようになったか。久しぶりで体もなまっとるだろう。特別メニューを考えてあるからじっくり体動かしていけよ」

と、いやな笑みをうかべながら言い放つと一枚のプリントを渡してきた。そのプリントの内容は何かというのと、

腕立て伏せ300回、腹筋300回、ランニング、ドーム10周、竹刀素振り500回、などハードメニューの盛りだくさんであった。

いやしかし、コレどう見ても無理だろこの1時間で全部は無理だつまり補習か?補習なのか?などと考えている優にむかって、

「ふふっ、頑張りなよ？」と社の哀れみのこもった励まし。あげく九護は、俺につきつきりで、休む暇もない。

他の生徒はどうすんだよ！

「心配するな。おまえみたいにさぼる奴らじゃない」皮肉たっぷりである。

30分後……

「ほら！あと、腕立て100回！」「無理っ、だって、絶対っ、不可能っ」

ゼエ、ゼエ、と息が荒くなるが、鬼のメニューは終わらない。

「次はランニングだ」「無理だー！」

「南無三」「ドームの端で、十字をきる社であつた。」

「……もうあんな教材うけない」

「あはは……。まあ休んでたのが悪いんだし、今度からは通常授業だつて」

「その通常授業だつて、やることほとんど変わらないだろ」

通常授業は、筋トレや体術などばかりで、接近戦をしないならうけなくてもいい授業である。しかし遠距離戦志望の生徒も、1年に何回かは出席しないとイケない、という最低ラインがあり、俺はあと6回ほどである。

「6回だよ？ 6回。楽なもんじゃない」そうはいうがな。俺は目につけられてんだよ。厳しいんだよ。

「つまり、さぼってもいいこと無いってことだよ」

「もういい、聞き飽きた。次は勇者学だっけか。まあ、寝ておけばおわるな」

「聞き飽きたって口癖？っていうか、寝ちゃ駄目だよ！」

「おもしろくないんだから、寝ちまうんだよ。暇なんだよ」

「もう……。ノートとるくらいならできるでしょ？」

「あつ！ノート忘れた！ちよいとりに戻る！」「えっ？ちよ、もうチャイムなるよ？」「間に合わせる！」タツ！「………いつちやった」

寮まで走って30秒、授業まではあと2分か……。ギリギリ間に合う！

寮から勇者学の教室は、幸いなことに近い。このままいけば間に合う……。はずだったのだが。

「おううわ！」「へっ？」「ドンッ！と曲がり角で、一人の女子生徒にぶつかった。

女子生徒は、勇学の制服（カッターシャツと膝丈より少し短いスカート）をきており、ショートカットですこし茶髪で……

「ってそんな場合じゃない！早くいかないと！」と、寮にいそごうとした優<sup>ゆう</sup>だったが、女子生徒の教科書類が散らばっていることに気がついた。

「すまん！」優はすぐに教科書類を拾い、積み重ねた。

「急いでんだ。じゃあな！」

あと1分、というところで寮につきノートをつかんで教室までダッシュする。勉強道具整理しといてよかったっ！

あとは教室まで走るだけ！

勢いよくドアをあけ教室に入り、一番後ろの端っこにすわったと同時にチャイムがなった。ギ、ギリギリ……。

「あつ、間に合ったんだ。よかつた」と、斜め前に座っていた社  
がこちらを見て囁く。

だが、社の言葉に返事はしなかった。いや、する余裕が無かった。

なぜなら、さきほどぶつかつた女子生徒が、隣の席に座っている  
からである。

「お前つ（あんたつ）さっきの！」

なんだコレは一体なんなんだ。どこかの漫画のワンシーンじゃね  
えかつ！いや、あれは転校生だったか……、いや、そうじゃなくて！  
「さつきはすまんっ！」とりあえず謝る。なぜとなりの席かが予想  
できたから。つまり、俺のせいでギリギリになつたのだから。

「あのねえ、あんたのせいで遅れるとこだったのよ！？ホント、曲  
がり角では注意してよね！」

「仕方ねえだろ！あれは急いでたから！」

「どうせ、忘れ物でしょ？ あんたが悪いんじゃない！」

「2人とも、そこまで。授業中だよ？」

社のいうとおり、授業は始まつている。そして、クラス中がこち  
らを見ていた。

結局遅刻と変わんねえじゃねえか……。

2時間目、これほど気まずい授業は初めてだ。なにせ、殺意の視  
線が隣から飛んでくるのだ。目をむけたら、殺られる。

一応ノートはとつたが、授業の内容はまったく頭にはいらなかつ



た。

### 3 時間目 魔法学

「やっと得意授業だ」とうかうかもしてられない。さきほどの女子生徒がみているのである。

「ねえ、優。あの人となにがあったの？」

社に一部始終を話した。

「へえー、それで……」

「なあ、あいつなんて名前なんだ？」

「ん、あの人？ あの人はたしか……」五月雨さみだれ 魅琴みこと「だったと思うよ」さすが物知り。

しっかし。どうしようか。ものすごく怒ってるっばいなあ。ここは無視しとくか。そんなことを思っていたら……

「今日の授業は2人1組で、魔法の実習、つまり魔物退治をしてもらいます。実習ドームに移動してください。そこに魔物をだすのでふむ、実習か。となると、下級ゴブリンとかを倒すんだろっな。」

というか、またドームか……。2人1組は、社とでいいか。など、考えていたら、ドームについた。

「なあ、社、一緒に」といいかけたところで、

「ペアは同じランクの人と組むように」と先生。

困ったな、Dランクで仲のいいやつはいないし。まあ、ペアがない奴探して組むか。

ということ、ペアあまりがでるまでまってたんだが……

「まさか、お前あんたになるとは……」

そう、話題の五月雨さみだれである。今日はつくづくついてないな。

「五月雨さみだれだっけ。お前Dクラスだったのか」

「文句ある？ていうか、なんで名前しってたのよ！」

名札見ればわかるだろ、という返事をしたとたん俺の名札をジロジロみてきた。

「ふ、ふちび、すぐる？」

「とことんまちがってるな。まあ、優をすぐる、とか読まれることは多い。ふちび、はさすがになかったが。」

「なんて読むのよ……」

そこまでして聞きたいか。

「聞かないと、なんかあったときに被害届だせないでしょ！」

俺をなんだとおもってたよっ！

「しらぬい ゆう、だよ。覚えとけ」

「変な名前ね」ぶっ飛ばすぞ……。

「五月雨、も珍しいと思うが？」

「一緒にしないで。どうせ、魅琴って名前も変だとおもってたんだよ……」

「いや、普通にかわいいと思うが。ぴったりの名前だろ」「っ！」「

いや、こんな茶番やってる場合じゃねえ。案の定下級ゴブリンも放たれてる。

倒しにくぞ。

「い、いわれなくてもわかってるわよ！」

10分後……

「あんた…、何なの？」驚くのもむりはない。なにせ、俺がつかう魔法はAランクでも使えない奴は多い。（社は剣術をつかうから別として）

この世界の魔法、というのは錬金術に依っていて、氷の刃を撃つみたいなの、氷呪文は氷を使用して使う。

やり方は、手のひらサイズの氷をもち、呪文を唱えて発動させる。火や電気も同様だ。

ただ、俺がつかう上級呪文は、敵をおしつぶすほどの氷をおとしたり、半径2メートルはあろうか、という火球をだしたり、雷おとしたり。こういうのは、修行をしてコツをつかまないと操れない。昔から、エアガンとか好きだった。つまり、遠距離攻撃がすぎだった。

この学園に入学して、魔法の存在をしったときから、もう修行修行の毎日で、そのせいで授業にでない気もする。

今おれのまわりには、氷づけのゴブリン、ゴブリンの丸焼き、黒こげのゴブリンなど変死のオンパレードだった。まあ、こいつらは弱いし下級呪文うってただけど、下級も究めて<sup>きわ</sup>いるから結構高威力だ。

「なんでそんな強いんだよ…」まだ呆然としている五月雨。社も最初は驚いてたなあ。

「もしかしてあんた、フリーダム マシチャン “自由の魔術師” 持ち？」

「うん。そうだよ」ワクワ さんみたいな言い方だぜ。

「フリーダム マシチャン “自由の魔術師”、それは何千万に一人の確率で体に宿る能力である。」

このラノベみたいな能力の効果は、だいたいの物質を魔法に使用できたり、魔法上達のはやかったり、といろいろ研究で発表されてるが俺自身あまり知らない。知りたい奴は、社にきいとけ。

「それより五月雨、「魅琴でいいわ」…ん？」

「名前ですんでいいっていつてるの！一回で聞き取りなさいよ！」

「そうか、じゃあ俺のことはユウでいいぞ」

「は？当たり前じゃない。どうして私が名前でよばせてあげるのに、こっちは名字でよぶのよ。わかるでしょ？」

なんで怒ってたんだ？

「とにかく、ぶつかったことは許してあげる。だからもう気つかうのはナシ。わかった？」分かった。

「じゃ、今日の昼屋上でね。」「なんでだよ」「昼食でしょ。わか  
んないの？」

いや、わかるがいきなり一緒に飯くおうってのはどういう風の吹  
き回しだ？

「意味わからん、って顔ね。いい？もうあたしたちは友達なの。こ  
飯くらい一緒に食べるのが普通でしょ？」へー、もう友達なのか。  
怒ったり、友達宣言したり、忙しい奴だ。

「それはいいが、お前、女子の友達と飯くわないのか？」

「気があうやついないのよ。それに、あんたといたらおもしろそう  
だし、同じDクラスでしょ？」

「そんなもんなのかねえ……。じゃあ、友達も一人連れて行くぞ？」

「えっ？ まあ、いいわよ……。好きにして」

おい、なんで残念がるんだ。

こうして、新しい友達？ができた。また口うるさいのが増えたく  
て感じだがな。ま、美人だしいつか。

「あんた、今私についてなんか思ったでしょ」「なんでもねえよ」

「ふふつ、仲直りできたんだ。一件落着だね」遠くから眺める社で  
あった。

**鬼の授業と女子生徒！？（後書き）**

次回は、四時間目からはじまります。

五月雨の紹介と社との出会いの回想、そんなところでしょつか。

次回「あの日の誓い」、お楽しみに！

## あの日の誓い 前編

4時間目は何事もなくおわり、約束の昼食である。社も快く返事をしてくれたので一緒に屋上に向かう。

「屋上で待ち合わせだっけか」

屋上は俺たちの寮の階段をあがって5階にある。国の設備ともあって、5階建ての寮はとても大きくきれいだ。屋上からの眺めは、勇学があるナガノの街を一望できる。

このナガノのいう街は、ニッポン列島の中心近くに位置しており、東西南北どこに魔物の群れが出現しても対応できるようになっている。

「それにしても、めんどくさがるの優が、友達つくるなんて珍しいね」

「押し切られたんだよ。友達になりたいっていわれて断れないだろ」

「ボクは友達に入ってる？優」

当たり前だろ。友達っていうより、親友の方が正しいくらいさ。

「ふふっ、よかった」

社は嬉しそうに笑う。そんなやりとりをしているうちに屋上についた。

「遅かったじゃない」もうきてたのか。せっかちなやつだ。

ミコトはもうきていて、至って普通のビニールのマットを広げていた。

「飯くうのにおおげさだな。そんなでかいの広げなくてもいいだろ」  
「うるさい。地面にそのまますわったら汚いでしょ」

む、性格に似合わず清潔だ。「なにかいった」「いつてないいつてない」

なんか心読まれてるな。いやいや、そんなことよりやるべきことがあった。

「紹介する。俺の同居人にして友達の御船 社だ」「よろしくね、ミコトさん」

「よ、よろしく……」

なぜか、緊張しているミコト。そうか、社が美青年だからか。見惚れるのも無理ないな、うん。

「挨拶はこれくらいにして、食べようか。昼食の時間は短いし」社は腕時計を見て言った。

「そうだな、あと7分だし食い始めるか」「う、うん」

緊張してるな。もしかして、男2人だから居づらいのかな。うん、そうだな。

「おい、ミコト。もっとリラックスしろよ。飯が不味くなるぞ」「あ、ああ」

一言ずつしかしゃべってないな。どうしたもんか。

と、おもっていると、

「あ、ボク飲み物買ってくるね」と、社が気をつかって屋上からでていった。そんなことしなくてもいいんだが。

「なあ、ミコト。社が苦手なのか？」

「いや、そんなんじゃないけど……」

「男2人で遠慮してるのか？」

「へっ？ 男？」

まさか、女だとおもっていたのか。そんな、どこかのラノベじゃあるまいし。

「ああ、社は男だぞ？ 正真正銘」

「い、いつから友達だったの？」

「いつだったかな。たしか

あの日の誓い 前編（後書き）

次回もお楽しみに。

11/6日に改稿しました。



あの日の誓い 後編(前書き)

## あの日の誓い 後編

……あれはたしか13才のころだったか。13才から寮生活が始まるのは分かるだろ？寮に行く奴はすくないけど。

で、俺は寮にはいる少ない生徒の一人だった。そこで、社と同じ部屋割りになったんだ。

7才から12才まで、友達なんかつくらないで、魔法の勉強ばかりしてたおれだから、どう話しかければいいか分からず1、2週間がすぎた。その間は男か女かわからなかったな。

そして、ある日の課外授業。第7学年（13才）がいく魔物退治の授業だ。

俺は、同じ部屋の社とペアにされてナガノの端の森に遠征、ゴブリン10体の討伐という形で授業がおこなわれた。後で聞くと、先生が裏からこっそりついてきていたから危険は少ないらしいけど、そのとき先生はそこらには生息していないはずの上級魔物をみつけて相手してたらしい。

先生が、もし上級魔物と戦っていなかったらこの右肩の傷もつかなかっただろうし、社とも、友達じゃなかったかもしれない

無言だなあ、とつくづく思う。うらからついてくる社くん（たぶん男）はあまり話しかけてこないし、自分も話しかけるのは苦手だ。そのせいで余計に静かな森のなかをあるくのはこわかった。ちよつと話しかけてみようかな……。

「なあ……」「何……？」「君って、剣術使うの？」「うん、そうだよ……」「……」「……」

会話が弾まない……。言葉のキャッチボール拒否である。

そしてしばらく進むと、

ガサツ、

「なんだっ？」 「ゴブリンかも…」

くっそ、ここででてきたら確実に厳しい。今使える魔法は、氷と火だが、森で火をつかうのは危険だ。

もつと開けた場所にでなければ氷しかつかえない。

「氷が5個か…」

5個では、上手くいってもゴブリン5体だ。残りの5体を社くんにまかせるのは危険だろう。

そんな計算をしているあいだに、

「ギシュアーツ！」 「ビヤギューツ！」

3体のゴブリンが茂みから出てきた。

「っ！アイスピアツ！」

優の前に氷の槍が生成され、ゴブリンへと飛んでいく。

「グフヤツ！」と、2体の体を貫いたが、1体は残ってしまった。

残りの1体が優に向かって、持っていたこんぼうを振り上げ襲いかかる。

「くっそっ！」目をとじて痛みにも備える。その刹那、ザシュツ！と肉が切れる音がし、目をあげると、ゴブリンが倒れていた。その死体の前には、返り血をあびた社がいた。

「危ないよ！どうしてもう一発撃たなかったの！」怒りが、しかし心配も混じった声で怒鳴られた。

「わ、わりい」 「もしボクが斬ってなかったら死んでたかもしれないんだよ！」 「だから、ごめんって」 「次はないと思っただけ！」

そのまま2人は、また無言で進み始めた。

なにもしゃべらなかつた。ただ無言で歩き続けた。

5分ぐらいたつただろうか。少し開けた場所へですぐに、茂みが音をたて揺れた。その音がどんどん近づいてくる。

同時にカラン、カラン、となにかの音も。

「さっきよりおおい…」 「ほら、構えて！」

『ギシャアーツ!』と茂みから6体のゴブリンがあらわれた。そしてその後ろには…

「動く骨!?!」  
スケルトン

そう、それは動く骨、スケルトンだった。手に剣と盾を持ち素早い動きで接近してくる。

「アイススパーツ!」

優のはなった魔法は、スケルトンのすこし右を飛び、一匹のゴブリンに当たった。

スケルトンが接近してくる。

「アイスウォール!」とつさに氷の壁を作りスケルトンの動きを鈍らせる。

しかし、この時点で優は冷静さを失っていた。

アイスウォールは、氷を2個消費する大技である。つまり残った氷はあと1個。

向こうでは、社の周りに3体の死体が転がっており、ちょうど1体を斬りおとしたところであった。

社はつぎのゴブリンに向かっていく。とその背中へスケルトンが向かいだした。

「やらせるかつ!」

優はとつさに氷の壁を解除し、社にむかって走る。社は最後のゴブリンを斬ったところだった。

その社の背後でスケルトンが、剣を振りかざす。

「えっ!?!」 「間に合えっ!」

ザシュツ! 「うぐっ!」

肩に激痛がはしった。肩の鎧をつけていたので、腕が切り落とされることはなかったが、鎧を砕いて剣が食い込んでいた。社の表情が、絶望の表情へと変わる。

「ゆ、優くん……!」

社の目の前に優が立ちふさがっている。そしてその肩から、血がダラダラと……。

「こんのお……、これくらいで……、くたばってたまるか……っ！」  
ふるえる片手で、ポケットからライターをとりだし火をつけ呪文を唱える。

「エクスプロージョンッ！」

スケルトンの頭が爆発する。スケルトンは粉々になり、優は衝撃でふっとばされ近くの木に背をうちつけた。

「優くんっ！」社が近づいてきて、傷の手当てをする。

「ボクを……かばって……っ」社は、涙を流していた。

「気に……するなよ……、守られてはっかじゃ格好わりいだろ……」

今の台詞なかなかかっこいいな、とか馬鹿なことかかんがえてたら意識が遠くなってきた。

……死ぬ、のか？

\*\*\*

ううん、ここはどこだ？ ベッドの上？

体を動かそうとしたが、肩に痛みが走る。

「いつっ！」 「あ、起きた!？」

む、社くんの声がある。となるとここは……、

「保健室だよ。先生が運んでくれたんだ」

横をむくと、社くんがいすに座っていた。目が腫れていた。泣いていたのだろうか。

「それにしても、ホントよかった……、ほんと……」社の頬に一滴の水が流れた。

「お、おい。泣くなよ。俺の自業自得なんだし、お前だって俺を助けてくれたじゃないか。貸し借りなしだろ？」

「無理だよ……、あれぐらいじゃゼロにならない……」

困ったな、これじゃあ泣きやまない。よし、

「俺の友達になってくれ」「……な、なんで？」 「それで貸し

借りゼロ、ってことじゃ駄目かな……」 なにいつてんだ、俺。

「う、うんっ！いいよっ！」 「はは、よかった」

これで、一件落着だな、社の笑顔をみながらそんなことをおもっていた俺のからだに暖かな感触が。な、なんだあ？

「ユウツ！もう今度から無茶しないでっ！約束してっ！」社が泣きながら俺に、抱きついていた。

「や……、約束する……」とかなんとかいったと思うぞ、俺は。

「まあ、そういう訳で」と、一部始終をミコトに話したわけだが、

「……」顔を赤くして、黙りこくっていた。熱でもあるのか？とそこへ、

「おい、優ー、ミコトさん、飲み物買ってきたよー」社が帰ってきた。

「おう、ありがと。今ミコトに、俺と社の友達になったきっかけをだな」「えっ、あれを言ったの!？」 「おい、お前も熱あるのか？顔が真っ赤だぞ。」

その社にむかって、

「ヤシロくん、あんたには負けないからっ！」なにがだ。

「ねえ、優！どこまで話したんだよ!」「お弁当っ、お弁当わけて

あげるわっ！「！

「うるせえっ、飯食わせるお！「

ナガノの街に、優の叫びが響いた……。

あの日の誓い 後編（後書き）

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします。

この後書き欄、前は他のことが書いてあったんですが消しました。  
知ってる人は知っている。

次回、お楽しみに！



## 目覚めし影

梅雨合宿……、それは俺たち7回生の、大イベント。

A、B、C、Dのすべてのクラスが、別々の魔王支配地にいき、訓練などをする。

いわゆる野外実習である。

目的はいろいろとあるが、仲間との信頼を築く、というのが最大の目標らしい。

「というわけで、このしおりを見て、準備しとくように」

そういって、九護先生はDクラスの生徒に、梅雨合宿のしおりを渡した。

なにになに？森にいつてキャンプ、か。あつさりしてるなあ。  
て、ちよつとまでよ……、これは……？

「先生、釣りとかキャンプファイヤーって遊びじゃないですか？」  
クラスの一人が訪ねた。俺もききたかったところだ。

「むう、それか。それは校長が決めたんだ。まあ、なんらかの目的があるんだろう」

なるほど、あの校長がきめたなら無理もない。

何代目かはしらないが、今の校長、朱雀校長は、イベントが大好きなのだ。

去年の秋の、仮装大会は、誰にとつても苦い思い出であるはずだ。

「とにかく、1週間後だから、準備はしておけよ」

「ヤシロはどこに合宿なんだ？」

「僕は海沿いだよ。釣りとかするらしいんだ」

「俺も釣りあるぞ。校長釣り好きだなー」

夜の10時をこえ、俺は寮でヤシロとそんな会話をしていた。

「はあ、ユウといけないの、残念だなあ」

「確かにな。授業は一緒なのに」

この学園の授業は、A、B、C、Dの各クラスから、決められた人数が集まって1グループとなり、授業を受ける。

下位のクラスが上位のクラスを見て、成長できるようにそんな制度になっているらしい。

その制度のおかげで俺はヤシロと一緒に授業をつけられるのだが。

「ユウが行く森って、北の森だよな」

「ああ、そうだが？」

そういうと、ヤシロはとても険しい顔になった。

「……その森、でるらしいんだよね……」

「……はあ？」

なんだ、怪談か？ヤシロがそんな話に興味をもつとは。

「僕のクラスの人から聞いたんだけどさ……。夜中にその森で、人影が何かを探し回ってるらしいんだよ」

「……ふーん」

「でね、そのクラスの人には怖くなってすぐ帰ってきたらしいんだけど、あんな魔物だらけの森に人影なんておかしいよね」

「魔物じゃないのか？」

「それが、絶対人だったっていうんだよ……」

「へえ。ってその人はなんで森にいったんだよ」

「落とし物を捜しにいったんだって」

「よくわからん話だな」

「とにかく、ユウも気をつけてね」

そういって、グイと迫ってくるヤシロ。

「わ、わかったから。もう寝る時間だ」

「あ、ほんとだね。お休みー」

「ああ、お休み」

俺は電気を消し、ベッドにはいった。

そして、俺はすぐに眠りにおちた……。

一方、北の森では……

「んう〜。眠いなあ。誰？俺様の眠りを妨げるのは……」

「……やっと見つけたぞ」

「あんた誰？」

少し小さな人影が、2倍もあるつかという人影に問いかける。

「ふん、そんなことはどうでもいい。さっそく俺の役にたつてもら  
うぞ」

「……はあ、なんで俺様があんたの手伝いしなきゃなんないの？」

「誰が貴様の封印をといたと思って」

「気持ちよく寝てたのを無理矢理起こすような人ときあいたくな  
いね」

少し小さな人影は、そういうと右手をもう一人の影に向けた。

その刹那、夜の森に、紫の光が輝き、衝撃が森をざわつかせた。

そして、辺りがまた静かになったときは、影は一つになっていた。

「ふう、この程度で僕の封印をとこうなんて、バカだねえ」

小さな影はそういうと、森に向かって歩き始めた。

そしてつぶやいた。

「さて、俺様の世界征服計画、第2楽章の始まりだ。わかってる、  
封印されるなんてドジは、もうふまないよ……」

## 目覚めし影（後書き）

長い間があき申し訳ない。

もう一つの小説かいていたら遅くなりました。

さて、今回の話の最後に、怪しい影が登場します。

影の正体はいかに！

次回、勇者のまなびやつ！、第6話 「梅雨合宿1日目」

次回もお楽しみに！

## 梅雨合宿1日目

うっそうと茂る木々。あふれるマイナスイオン。  
俺たちDクラスは、梅雨合宿地の北の森にきていた。

「すごい山奥ねえ。こんなところに3日間とか拷問よ、拷問」

森に向かうための飛行船（地上は魔物が危ないので、バスなどはつかわれていない）から降りたミコトの、第一声がそれだった。

「合宿なんだ、当たり前だろう？」

「そうはいつでもね。あたしは女の子なのよ？」

女の子だからいろいろとアブナイんだ、と目で訴えてくる。

やれやれ。

「大丈夫だ。お前みたいなのを襲うような奴は、このクラスにはいないからさ」

「……あとでぶちのめす」

軽い冗談だったのに、ミコトはとてつもなく恐ろしい形相でこちらをにらんでいる。

やばい、背筋が寒い。

「ほんまあかんでえ？ オナノコにそんな冗談は」

俺たちのあとに降りてきた男子生徒が、突如そう言った。

天然パーマにたれ目が印象的で、よく言えば美形、悪く言えば間抜けそうな、そんな顔立ちだった。

「誰だ？」

「オレか？オレはケンタロウ。牧原まきはらケンタロウや。ケンタでもタロウでもどっちでもええで？」

馴れ馴れしいヤツだ。しかし、ケンタロウ……。どこかで聞いたような名前だな。

えーと、なんだったか……。

「じゃああたしはケンタで」

「そうか。よろしくたのむわ！」

いかん。ミコトがこの怪しい男のペースに乗せられている！  
しかし、なんだったか……。

「あんたはDクラスでしょ？じゃああたし達と一緒に行動しない？」

「？ あれ、ここDなんか。オレはてつきりAクラスや思ってきたんやけど」

「っ、まさかっ！？」

こいつはAクラスの中でも上位の男！

数々の魔王を、ダガーナイフ2本で沈めるといっ、

「通り魔ケンタロウ！」

「お。オレのことしつとんか。嬉しいなあ」

その異名に似合わないきさくなひとがらと関西弁は、女子の間でも人気だとヤシロに聞いた気がする！

「なんであんたがここにいるんだ！？」

「いやあ、オレうつかりさんでな？Aクラスの飛行船と逆にあつたやつに乗ってももうたみたいなんや」

「なんて天然なの……っ」

あまりのアホらしさにミコトが絶句している。

「しかし困ったもんやな。一回先生にきいてみるわ。ほなさいなら」

ケンタロウは手をふりながら、先生と真逆の方角へ走っていった。

「あれは天然っていうより方向音痴ね……」

同感だな。

俺たちは今、山小屋の掃除をしている。山小屋は10戸ほど。

生活は山小屋で過ごすらしく、まわりには魔物よけの結界がはられていた。

「きつたない部屋ねえ。もつとマシなところないのかしら」  
さつきからぶつぶつとミコトが愚痴を言いながら、ほうきで床を掃いている。

「じゃあないでミコトさん。使われるんは一年に一回うちゅう話や」  
ケンタロウは今更Aクラスと合流することはできないらしく、Dクラスの合宿にさんかすることになったらしい。

本人にとっては、どっちでもいい、といった様子である。

「せや、部屋割りはオレとユウ君にしよう！それがええ！オレも知らんやつばっかで気まずいんや」

「いきなりなにを言い出すかと思えば。とても気まずそうにはみえないが？」

「ちやうちやう。気まずいからこそ、フレンドリーに明るくなるベキやろ？」

「……好きにしてくれ。あと、同室なら君づけはやめよう」  
ほんとうに明るいやつだな。

感心をとおりこしてあきれる。

「とにかく、早く掃除おわらせるぞ」

「はいはい」

「せやな。そうしよ」

なんだかんだいって聞き分けはいいよな、この2人。

掃除が終わると、もう夜になりかけていた。

晩ご飯の用意をするらしく、女子は調理班。男子は薪集めとなった。

魔法をつかえば炎などすぐにでるのだが、九護先生から、

「お前らは魔法にたよりすぎだ！そもそもお前らは魔法をまともに扱えるのか！？」

という説教がとんだので、仕方なく従うことにした。

合宿まで九護先生がついてくるとは……。Dクラスも信用されないもんだな。

とにかく薪だ薪。薪を集めるぞ。

「ユウはほんま熱心に薪あつめるなあ」

一緒に薪集めをしていたケンタロウが、そうつぶやく。

「好きでやつてるわけじゃない」

「好きでやつとるようなヤツがおるのか？」

少なくともDクラスにはいないな。

そんなどうでもいい会話をしながら、薪を集める俺達。

薪は結構おちてそうなるもんだが、いい大きさのものは少ない。

「好き嫌いっちゅう話やつたら……」

「なんの話だ。Aクラスには薪厚めが趣味のやつがいるのか？」

「ユウはミコトさん好きなんか？」

「ぶっ!？」

いきなりなにいいだすんだコイツ!?

「普通の友達だっ!」

「ははーん、向きになるのが怪しいなあ」

落ち着け俺。動揺しては、逆に不自然だ。

「(スーハースーハ) そんな訳ないだろ? 友達、友達」

「深呼吸するか、普通」

ケンタロウはたれ目を細めながら笑っている。

くっ!

「そういうお前はどうかだよ!」

「オレか? オレは女子なら誰でも大歓迎や」

……逆にこうキツパリ言われると反論しにくい。

「特に20代以下で美人やつたらめっちゃ大歓迎や。ミコトさんも

例外やない!」

「……12才ぐらいは?」

「全然オツケーや!」

こいつはやばい。アブナイ人物ここにいたぞ、ミコト。

まさか通り魔ケンタロウの本性がこんな変態だったとは。



これをしつたら女子からの評判は、少しは落ちるのだろうか。

「まあ、女はこわいところもあるけどな」

今はお前のほうが怖いよ。

「もうこの話はやめだ！薪集めに集中！」

「上手く話題そらしたな」

ククツ、と笑うケンタロウ。

Aクラスにも、変人っているんだな……。

薪集めを終えて山小屋にもどると、もうおいしそうなカレーができていた。

キャンプはカレーときまっているのだろうか。カレーが嫌いなわけではないが。

よく見ると、カレー鍋は炎魔法で温められている。

あれ……、薪集めた意味ってあったのか？

「あ、カレーよそってきたるわ。ちよつちまつときや〜」

そういつて、ケンタロウは俺とミコトのぶんも、カレーをもってきてくれた。

「よし、食べるか」

「いただきます」

「いただきます」

月がでている野外での食事でも悪くない。

「このカレー、あたしも作ったのよ。美味しい？」

「ああ、美味いぞ」

「普通にうまいで」

「ホント？ よかった」

ミコトは満足そうに笑いながら、またカレーを食べ始める。

本当、おいしいな。このカレー！

そのままパクパクと食べ進めていると、目の前にスプーンが突き出された。

「……あーんして」

いきなりの事態に、俺の頭上でハテナマークが浮かぶ。

「……あーん、だと？」

見るとミコトが恥ずかしそうにスプーンを向けている。

「いったいどういうことだ？」

逆方向をみると、案の定ケンタロウがにやにやしていた。

「ほれほれ、たべてあげなや」

ケンタロウが囁いてくる。

「ここで素直に食べたほうがいいのだろうか。」

いや、恥ずかしがっては逆にケンタロウにバカにされる。

「……あーん」

俺は素直にカレーをいただいた。

やっぱり恥ずかしいもんだな。

っつて、

「辛あああああああああ！」

なんだこれは！のどが焼けるように痛い！

まさかっ！

「ねえ、ユウ？そのカレー、唐辛子とわさびとババロア入れてみた

の」

「からしはいれんかったんかいな」

ケンタロウがくくくつ、と笑う。

笑う暇があったら水をわたせよっ！

くそっ、なんでだ！？俺がなにか怒らせるようなこと……、

「ユウ……」

「な、なんだ？ ケホッ」

「少しは朝の発言、反省した？」

……ケンタロウ、女って怖いな。

「おっ？ あっちから美味そうな臭いがするね」

夜の闇のなか、森のなかにたたずむ一人の影。

「そっぴやおなかへったなあ……」

影は、はあ、とため息をつき、座り込んだ。

「よし、夜中にいただきにいこう！」

立ち上がり、大きく伸びをする影。

そして

「まずは君たちを殺してから、ね」

茂みに隠れていたゴブリンたちにむかって、手をかざすのだった  
……。

## 梅雨合宿1日目（後書き）

今回の話、いかがだったでしょうか！

オチから考えたわけではありませんが、結果として上手くおとせたのではないかな、と思います。

次回は梅雨合宿2日目。

怪しい影の正体が、そろそろあきらかになるでしょうか。

次回、お楽しみに！

長いあとがきは、まだ書けません。あしからず。

## 梅雨合宿2日目

もう6月とはいえ、山小屋の朝は肌寒いものだった。

俺は毛布を被り直そうと、地面に敷かれた布団の上で寝返りをうつ。

だが、体が少し重たい。

というより、なにかが俺の体にのしかかっているようだ。

「むう、ハーレム……、むにゃむにゃ、ラブレター、下駄箱……」

欲望をそのまま表したような単語の数々が、耳元から聞こえてくる。

この部屋には俺を含め2人しかいない。

つまりこの声は……

「ケンタ……ロウ？」

目をあけて首を少し傾けると、視界にケンタロウの寝顔がはいってきた。

なんともまのぬけた寝顔である。

しかし寝ているケンタロウは、たれ目のせいでアザラシみたいだ。魔物のせいで絶滅危惧種になったアザラシをこんなところでみれるとは、そう思うくらいそっくりだった。

「うんしょっ、と」

俺はそのアザラシを起こさないように、布団から這い出た。

壁にかけられた時計は5時を指している。

他に誰か起きてないかな、そんな気持ちで俺は寝起きのジャージのまま外にでた。

外は閑散としていて、鳥の鳴き声が少し聞こえるくらいだった。

そして外には、ミコトがいた。

何をしているんだ。

「おい、なにしてるんだ？」

「……なんだ、あんただったの。」

トレーニングよ。あんたに負けてられないからね」

「ふーん、頑張ってるな」

こんな朝早くから練習するなんて……。少し見直した。

俺はしばらく近くにあったベンチで、ミコトの練習をみることにした。

「別に見てもらう必要はないんだけど」

そういながらミコトは、ハンドガンを一丁とりだした。

たぶんモデルガンだろうが、なかなか本格的である。

それにしても銃を使うのか。見かけによらずかっこいいな。

ミコトは抜き打ちの練習や的当てを数分行い、休憩にはいった。

「ふう、疲れた……。なんか飲み物ない？」

「とってこようか？」

「大丈夫よ、別にそこまで飲みたい訳じゃないわ」

「立ってるままじゃ疲れるだろ。座れよ」

俺はベンチの端っこに移動し、スペースをあけた。

「……じゃあ、遠慮無く」

反対に座るミコト。

辺りは静寂に包まれていた。

ミコトからはなしかけるわけでもなく、俺が話し始めるわけでもなく、ただ静かな時間が過ぎていった。

遠くから聞こえる鳥の声が、妙に大きく聞こえた。

合宿2日目の内容は、森にはいつての戦闘訓練だ。

俺は今、ペアと森の中にいる。

内容は、夕暮れまで森で生き延びろ、とのこと。

一応、発煙筒や携帯など逃げるための荷物は持たされたが、ほと

んど自力で戻ってこなければならない。

そして俺のペアはというと、

「よっしゃ！やっとな戦いか！」

ケンタロウである。

一番交流のあった俺が適任だと思われたらしい。

まあAクラスだから、頼りにはなる。

「しかし、この辺はゴブリンとかがおもな魔物やったと思うけど……」

辺りを見回すケンタロウ。

「別にわざわざ戦闘しなくてもいいだろう。適当にふらふら歩いて時間つぶそう」

「……案外不真面目なんやな」

戦って疲れるのは嫌だし、ゴブリンがかわいそう、と思うのはおかしいだろうか。

「別におかしくはないやろ。弱いモノいじめになったら、人間のほうが魔物みたいになる」

ケンタロウは俺の意見に首肯している。

「ま、とにかく今は夕暮れまで生き延びよう」

俺はそう言って、歩き始めた。

ケンタロウの戦い方は、スマートなものであった。

ゴブリンに気づかれるやいなや、ダガーナイフを取り出し、わめかれる前に一撃でしとめる。

まさに“通り魔”のあだ名がふさわしいモノだった。

「コウは戦わんのか？」

「お前が全部仕留めちゃうんだから、手のだしようがない」  
俺は苦笑しながらそういった。

「ははっ、その通りやな。

でもユウは弱いわけじゃないやろ？」

「……なぜそう思う？」

「なんつーか、こう、ただならぬ魔力みたいなんを感じるんや。

あふれ出るオーラ、みたいなもんか」

俺は意表をつかれた。

ケンタロウのことを、少し見直さなければならぬ。

俺の能力を感覚で感じ取った人間は、ケンタロウだけではないだろうか……。あ、九護先生がいたか。

そんな思索にふけていたからだろうか。

俺はいつのまにか裏をとられていた。

「っ!?!?」

俺は現実を意識をもどし、その気配から遠ざかる。

俺のいた場所には、少年がいた。

……ちいさな少年が。

「……君は？」

ナイフをとりだしていたケンタロウが問いかける。ナイフもうしまえよ。

「とおりすがりの少年、だね」

少年は笑いながらいった。

「何故ここにいる？」

ケンタロウはナイフを構えたまま、また問いかける。

おいおい、ナイフはいい加減にしまえよ。

そう俺が言おうとしたときだった。

「君たちと、戦うために、かな」

少年はそういうやいなや、手をケンタロウの方向に向け、紫の弾を放った。

「なっ!?!?」



ケンタロウがのけぞる。

ナイフはケンタロウの手を離れ、放物線を描きながら地面へと落下し、土に突き刺さった。

今のは……、魔法!?

「……弱いね。すごく弱い。こんなんじや全然楽しくないよ」  
少年は呟く。

一体、何者なんだ……?

「人間なんてそんなものですよ。さあ、早くとどめを」  
森の奥から、新たな声が近づいてきた。

誰だ?

「クルトス、こいつは生かしておくよ。もっと強くなる気がするんだ」

「ならそちらの男は?」

クルトス、と呼ばれた少年の2倍ほどの背丈の男が言った。

俺のほうを指さして。

「……お前らの目的はなんだ?」

俺はそう問いかけた。

声は震えている。

恐怖ではなく、怒りで。

「私たちの目的は世界征服です」

「いや、俺様は違うよ? ただ強いヤツと戦いたいだけさ」

男と少年が言い争っている。

一体こいつらの正体はなんだというのだ……。

「とにかく、君。俺様と戦ってくれよ。不意打ちなんてしないからさ」

「さっきのは不意打ちやないんか?」

ケンタロウは苦笑しつつもう一本ナイフをだして、戦闘態勢をとっている。

戦うしかないのか……。

「こいつは私が」

クルトスという男がケンタロウのほうを向いて言った。

「うん、いいよ。俺様はこいつと戦うから」

「だったら……」

「先手必勝！」

「こつちからいかせてもらおう！」

俺はポケットからライターととりだし、呪文を唱えた。

俺と少年の間に、大きな爆発がおきる。

それを合図として、戦いの火ぶたがきられた。

「甘いよ！ もっと本気できなよ！」

少年が次々と、紫の弾を放ってくる。

「ちっ！」

俺は紫の弾を氷の壁で防いだ。

氷の消費が激しいが仕方ない。

ケンタロウ達は、離れたところへいつのまにか行っている。

戦いを混戦にしないためだろう。

だったら、大技を使っても大丈夫だ。

「悪いが終わらせる！」

俺はスタンガンを取り出し、雷魔法を唱えた。

辺りに稲妻が落ちる。

「つひゃー！ すごいなオイ！ 人間とは思えないよ！」

少年は、少し余裕のある動きで稲妻をかわしながら叫んでいる。

これもよけられるのか……。

フリーダム マジシャン  
「自由の魔術師だね！？」

「こんなことができるのは！」

俺の能力を一発で見破るところを見ると、やはりただの人間ではないようだ。

「魔物、か？」

「少し違うね！ 俺様は人間が作り出した魔物！人造魔物さ！」

少年はそういいながら、さっきより大きな紫の弾を形成する。

「別に世界征服なんてどうでもいい！」

戦うことが俺の生き甲斐！ 生み出された意味！」

「だからといってっ！」

俺は紫の弾を防ぐために、氷の壁を再度形成する。

「俺様は証明する！」

俺様を作った人間に！

母さんに！

俺の存在意義を！」

少年は叫び、そして紫の弾を撃ち出した。

それは、氷の壁などいともたやすく破壊し、俺にせまる。

だが……、

「ぬるいな」

俺はとっさに氷の壁を5枚同時に作り出した。

紫の弾は、5枚の壁に阻まれ、爆発を起こした。

「……こんなものか？」

俺は苦笑する。

それは嘲笑も混じっていた。

「なにがおかしいっ！」

「お前になにがあるのかはしらんが、相手は選ぶべきだ」

俺はそういつて、地面に手を当てた。

「どついう意味だ！」

少年は顔を真っ赤にして怒鳴り散らす。

もう子供同然だ。

「こついう意味だ」

俺はそういつと、呪文を唱えた。

地面が隆起し、少年の周りに土の壁ができる。

そしてそれは少年に向かって倒れかかった。

「こんなものでっ！」

少年はその場から離れ、直撃をさける。  
だが、

「それで終わりだと思うな」

俺は近くにあった木に手をあて、呪文を再び唱えた。

木の根が少年に伸び、からみつく。

「っ！？ クソッ！」

少年は抜け出そうともがくが、根はさらにからみつくばかりだ。

「詰んだな」

俺はライターをとりだし、少年の前に近づけた。

だが、魔法は唱えない。

「なんだよ！ 早くとどめをさせってんだ！」

「……お前を殺す理由が見つからないんでな」

そういうと、少年はあっけにとられた表情で俺を見つめた。

「……自由の魔術師だけじゃないんだな？」

「お、そこまで分かるのか。一体何者だよ」

「だからいっただろ、人造魔物だって」

少年はもう開き直った様子でそう答える。

「お前の名前はなんだ？」

「ファイター 《戦う者》、それが俺様につけられた名前、だったよ

うなきがするよ」

少年、ファイターはそういうと、大きくため息をついた。

「俺はユウだ」

「そう……」。

初めてだよ。あんたみたいな人間は……。

俺は生み出されてから実験ばかり。

あげくの果てに封印だなんて、ばかげてる……」

「だが、世界を征服したところで、お前の求めるもの手に入らない」

「ははっ、なんでもしつたような口調だね」

さて、一度先生に連絡を

そのとき、視界をジェット機のように影が通り過ぎた。

飛んでいった方を見ると、ケンタロウが転がっている。

「大丈夫か!？」

「おやおや、困りますねえ。世界征服は行ってもらわないと」  
ケンタロウがとんできたほうから、クルトスが歩いてきた。

「クルトス……、今回も裏切る気が……」

「はははは！ あなたはいい君主でしたよ。同時に、扱いやすい君主でしたがね」

クルトスはそういうと、大きな剣をとりだした。

突然だしたということは、魔力で形成されたものだろうか。  
ケンタロウが負けたということは、相当強いのだろうか。

「さて、役立たずの君主には死んでもらいましょうかね」  
クルトスが剣を振り上げる。

仕方ない。ケンタロウの前だが、自然魔法を唱えよう。

俺はクルトスに向かって魔法を唱えようとした。

だがその必要はなかった。  
なぜなら……、

「鉄拳！」

クルトスの頬を、鉄拳がとらえたからだ。

クルトスは吹き飛ばされ、木に頭を打ち付ける。

そして、起きあがるうとしたところを数人の男達に取り押さえられた。

「お前らあ！ また派手に暴れおつてえ！」

鉄拳の主は、九護先生だった……。

結局その日は全員がキャンプ地に撤退。

ファイターは鉄拳の衝撃で根から抜け出していたらしく、もういなかった。

結局あいつはなにがしたかったのだろうか。

そして俺たちかというと……、

「人造魔物、か」

「はい、見かけは少年でしたが、人間離れた魔法の使い手でしたね」

「俺の相手は普通の魔物やったらしいけどなあ」

事情聴取の真っ最中であつた。

ケンタロウは怪我をしているため、ベッドにのつたままである。

人造魔物は九護先生でもしらないらしく、校長に聞けばなにかわかるかもしれない、とのことだったが、実際には迷宮入りだ。

「とにかく、ケンタロウは絶対安静だ。明日の釣りなど行かせられん！」

「嘘やる！」

「……やれやれ」

結局ファイターは何者であつたのか。

俺はそのことだけが、気がかりだった。

「さて、晩飯を作る時間だ。

薪集めは危険だから今日は中止。

女子を手伝つてくれ」

「分かりました」

「ケンタロウはベッドからでてはならんぞ」

「そんなあ……」

「あとユウ、ちょっとこつちこい」

「？ なんです？」

俺は九護先生に近づく。

「お前らの戦闘場所に、根が張り巡らされてたり、地面が隆起したりしていた。」

「お前、なにかしってるか？」

知ってるもなにも、俺の魔法である。

だが、

「……知りませんね。戦闘でえぐられたんじゃないですか？

自然を操る魔法というのは、現在確認されていませんし、なににより自然物を魔法に仕様することは不可能です」

「いや、分かってはいるが、辺りに魔力が散らばっていたのでな。

魔法に関してAクラス並のお前なら、なにか分かるとは思ったが

……。

まあいい、今日はゆっくり休め」

「では、失礼します」

合宿2日目は、こうして終わろうとしていた……。

「イタタ、まだ腰が痛い……。

しかし、世界って広いなあ。俺様より強いやつなんてごろごろいるんだもんなあ……。

……よし、決めた！俺様は世界を巡って修行して、ユウにリベンジする！」

もう夜も深い、真っ暗な森で、小さな少年はそう決意した。

梅雨合宿2日目（後書き）

うぐぐぐぐ、バトルシーンは難しい……。  
しかも主人公が予想以上に強かった……。  
自分で書いてるんですがね。



## 合宿最終日

「はぁ……」

「どうした？　ため息なんかついてさ」

「いや、ちよつと面倒なことが増えてしまつて、な」

「？　なんだそれは」

「いや、忘れてくれ」

俺はミコトの質問を切り捨て、釣りに集中することにした。

「そういえば、昨日は大立ち回りだったそうじゃない。」

Aクラスの魔物を追い払ったんでしょ？」

「話が早いな……」

ファイターは今頃どうしてるのだろうか。

やはり、修行の旅やらに出かけたのだから……。

そうかんがえるとやはり、ため息をつかざるを得なかった。

話は朝にさかのぼる。

ケンタロウは、けが人用の小屋にいるため、俺の小屋には一人だけだった。

また朝早く起きた俺は、また外に出てみた。

……でない方がよかつた。

なぜなら、入り口の真正面に、ファイターがいたからだ。

「おはよう！　今日もいい朝だねえ、ユウ君」

「俺にとっては最悪の朝になったな」

そういうやいなや、俺は扉を閉めた。

「ちよつとまつてよ！　俺様の話を聞いてよ！」

「セールスはお断りだ」

「今の時代、セールスなんてないでしょ！」

ファイターが、ドンドンと扉をたたく。

このままだと、九護先生が気づいてしまうだろう。

「……もういいや、ドア越しでいいから聞いてね？」

俺様、修行にでるよ。ユウ君にリベンジするためにね」

「はあ？ やめるおい、もう戦いたくねえよ」

「そんなの知らないよー。俺様、二ホン一周計画を立てたんだ」  
何故に二ホン一周？

「だから、俺様以外の魔物に殺されないようにしといてねー。

ユウ君を倒すのは俺様だからねー」

「知らん。好きにしろ。ていうかどうやって結界破ったんだ」

「あれ？ 行ってなかったっけ。」

俺様って、人間と魔物のハーフみたいなものなんだよ。

まあ人工的に作られたから、本物のハーフじゃないけどね。

でも、結界は俺様には作動しないんだー。よかったねー」

「……はあ、もういい。用件が済んだならさっさと旅立ってくれ。  
目障りだ」

実際には扉越しなので、見えてはいないのだけでも。

「あー、はいはい。じゃあまたねー」

そうファイターが言った直後、ドアの向こうの気配は無くなった。  
もう二度と会いたくない。修行中にくたばってほしいものだ。

そんなことがあり、今日の合宿内容に時間は戻る。

「あ。釣れたわ。やったー」

「驚くほど棒読みだな」

ミコトにつっこみをいれつつ、俺は水中の魚たちを眺めた。

魔物にすみかを奪われていてなおこんなに魚がいるとはビックリ  
だ。

「……平和だな」

ポツリとそう呟いてみる。

「確かにね。この平和が長く続けばいいんだけど」

「同感だ。少なくとも魔物が全滅することはないだろうかな」

そういつて、俺は釣った魚をリリースする。

あ、もつたいない、とミコトがいうが、無視だ。

リリースされた魚は川でポチャンと音をたて、すぐに対岸へ泳いでいった。

川に波紋が広がり、ゆらゆらと反射した俺たちの影が揺れる。

「……いつまでこうするんだ？」

「うーん、私はいつでもいいんだけどね。

なにもすることないし……」

「まあな。確かに退屈かもしれん」

「いや、別にそんなことは……。私はアンタといられたら……」  
なにやらミコトがごにょごにょと呟いている。

……やはり退屈なんだろうか。

「退屈なんだったら、付き合ってくれないか？」

「へっ！？ 付き合う！？」

そ、そんな急に言われてもまだ心の準備とかが出来てないし、それに私だってその……」

？ なにを勘違いしてるんだ？

ミコトが顔を真っ赤にして首をブンブン振っている。

「いや、いやならいいんだぞ？」

ケンタロウにでも頼むから」

「えっ？ それは駄目よ！

男同士なんて……、そんな……」

ミコトはまた顔をブンブン振っている。

どうしろというんだ。

「将棋くらいあいつでもさせるだろう」

「え……。将棋？」

「ああ。ミコト、前に将棋強いとか自分で言ってただろ？  
だからどうかなと思って」

「……なんだ、将棋ね。」

「そう、そうよね、アハハ……」

「一体なんだと思っただよよ？」

「いや、なんでもないわよ。」

「ほら、将棋するんでしょ？ 私部屋からとっってくるからまって  
ね」

「ミコトはそういうと、足早に将棋盤を小屋へとりに行った。  
なんかおかしいこといったかな、俺？」

「王手飛車取りね」

「……ちっ」

「ひゃー。ミコトさん強いなー」

「ケンタロウがかわいそうだったので、俺とミコトはケンタロウの  
寝ている小屋で将棋をすることにしたのだが、ミコトは強かった。

今は3戦目なのだが、もう2回負けている。

「ちなみにケンタロウは将棋よりチェス派だそうで、将棋は観戦だ  
けしている。」

「王手。詰みね」

「ミコトの勝ち誇った顔を見るのがこれで3回目となってしまうた。

「もう一回だ」

「またあ？」

「じゃあ、次私が勝ったら何でも言っこと聞きなさいよ？」

「……約束しようじゃないか」

「おお、かつこいいいやないか。それでこそユウや！」

「合宿最後の日は、こうしてゆっくりと終わりを迎えた……。」

ちなみに、俺はミコトに学校近くの人気ケーキ店のモンブランを  
奢らされるらしい。

俺の財布も終わりを向かえるかもな……。

## 合宿最終日（後書き）

最終日、ミコトがデレてきたところで終わります。

なんだか方向性がおかしいと思っっているそのあなた、次から新章、否、真章です！

ファイターさんが主人公となり、話が進みます。

一応3人称になるので、覚えておいてください。

では、真章「小さき魔人の旅行記」お楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8275w/>

---

勇者のまなびやっ！

2011年12月4日00時51分発行